

〈資 料〉

運動形態発生に係る運動観察記録表及び実践事例研究論文構成
についての検討

浦井 孝夫*

An Analysis of Movement Observation Charts Concerned with Improving Motor
Form and Research Article Structure

Takao URAI*

1 研究の目的

スポーツ運動に関する実践的研究を促進するため、運動形態発生に係る運動観察記録表及び実践事例研究論文構成のモデルを作成することを目的とする。これにより実践的研究を一層促進するとともに、体育教師やコーチに不可欠な運動観察能力及び運動共感能力の向上に寄与するものである。

2 研究の方法

- (1) 観察記録表及び論文構成のモデル(検討案)の作成
 - ア 各種の実践事例研究論文の収集・検討
平成15年4月～平成16年3月
 - イ モデル(検討案)の作成
平成16年4月～8月
- (2) モデル(検討案)についてのアンケート調査
 - ア 期 間：平成16年10月～12月
 - イ 対象者：日本スポーツ運動学会役員等40名(回収38名, 回収率95%)
 - ウ 内 容：観察記録表の各項目及び論文構成の各項目について、「必要」「どちらかというとな必要」「どちらかというとな必要」「不必要」

「わからない」の5段階のアンケート調査
：自由記述調査

3 調査結果の検討

- (1) 5段階のアンケート調査の結果、「必要」及び「どちらかというとな必要」を必要、「どちらかというとな不必要」及び「不必要」を不必要とし、必要とする割合が90%以上の各項目を採用した。

また、採用にあたっては、自由記述の調査内容を参考とした。

4 ま と め

検討の結果、「運動形態発生に係る運動観察記録表及び実践事例研究論文構成のモデル」を提示する。(別紙1, 別紙2)

()内のゴシック体は、実践的研究を進めるための各項目についての説明例である。

* 体育科教育学研究室
Sport Pedagogy

(別紙 1)

I 運動形態発生に係る運動観察記録表のモデル

1 自己観察（運動実践者の内観観察分析）の聞き取りによる記録表

（教師やコーチのもとで生徒や選手が学習や練習に取り組んでいる運動（技）を研究対象として取り上げる。そして、その運動（技）を習得する上での「動きかたの要点」を3点ほど運動実践者本人から聞き取り記述する。さらに、「動きかたの要点」を踏まえさせながら、運動（技）の習得過程における「動きかたとその動ける感じ」の変容を運動実践者本人から聞き取り記述する。）

1 自己 観察の 視点	(1) 動きかたの 要点 (3点ほど記述 する。習得過程 で変わった場合 修正する。)	(2) 「動きかたとその動ける感じ」の変容							
		ア 図形的内容		イ 力動的 content				ウ 心理的内容	
		(ア) 動きの局 面構造	(イ) 動きの 調和	(ア) 動きの リズム	(イ) 動きの 伝動	(ウ) 動きの 流動	(エ) 動きの 弾性	(ア) 動きの 先取り	(イ) 動きの 正確さ
		(研究対象の運動（技）に応じて、自己観察の視点を具体的にする。)							
2 計画に 基づく 観察の 日時	1回目（日時）	（「動きかたの要点」を踏まえさせながら、「動きかたとその動ける感じ」の変容を聞き取り記述する。）							
	2回目（日時）	（同 上）							
	3回目（日時）	（同 上）							
	4回目（日時）	（同 上）							
	5回目（日時）	（同 上）							
	6回目（日時）	（同 上）							
	7回目（日時）	（同 上）							
	8回目（日時）	（同 上）							
	9回目（日時）	（同 上）							
	10回目（日時）	（同 上）							

2 他者観察（研究者の印象観察分析）の感じ取りによる記録表

（教師やコーチのもとで生徒や選手が学習や練習に取り組んでいる運動（技）を研究対象として取り上げる．そして，その運動（技）を発生する上での「動きかたの要点」を3点ほど研究者が考えて記述する．さらに，それらの要点を踏まえながら，運動（技）の発生過程における「動きかたと動きのかたち」の変容を研究者が感じ取り記述する．）

1 自己観察の視点	(1) 動きかたの要点 (3点ほど記述する．習得過程で変わった場合修正する．)	(2) 「動きかたと動きのかたち」の変容							
		ア 図形的内容		イ 力動的内容				ウ 心理的内容	
		(ア) 動きの局面構造	(イ) 動きの調和	(ア) 動きのリズム	(イ) 動きの伝動	(ウ) 動きの流動	(エ) 動きの弾性	(ア) 動きの先取り	(イ) 動きの正確さ
		(研究対象の運動（技）に応じて，他者観察の視点を明確にする．)							
2 計画に基づく観察の日時	1回目（日時）	（習得上の「動きかたの要点」を着目しながら，「動きかたと動きのかたち」の変容を記述する．）							
	2回目（日時）	（同 上）							
	3回目（日時）	（同 上）							
	4回目（日時）	（同 上）							
	5回目（日時）	（同 上）							
	6回目（日時）	（同 上）							
	7回目（日時）	（同 上）							
	8回目（日時）	（同 上）							
	9回目（日時）	（同 上）							
	10回目（日時）	（同 上）							

(別紙 2)

Ⅱ 運動形態発生に係る実践事例研究論文構成のモデル

〈前文関係〉

- 1 テーマ
- 2 著者名
- 3 Abstract
- 4 キーワード

〈本文関係〉

1 序論

(1) 研究の動機

(研究者自身のこれまでの運動実践学習(指導)や運動理論学習(指導)の経験を踏まえて、体育授業や運動部活動において子どもたちが運動を覚えたり、それを教員やコーチが促したりする活動を円滑に進めるにあたっての疑問点や問題点を把握する。そして、それらを解決するため、このテーマを設定し研究を進めるといった研究の動機を述べる。)

(2) 先行研究の検討

(このテーマで研究を進めるにあたって関連する論文を3編程度収集し、検討する。検討したところ、自分の疑問点や問題点を解決するためにはこれらの論文では不十分であり、そのためには新たに、このテーマを設定し研究を進めることが必要である旨を述べる。)

(3) 研究の目的

ア 具体的な目的

(運動実践者が取り組む学習対象や練習対象の運動(技)についての「動きかたの要点」を記述する。そして、その要点を踏まえながら運動(技)の習得・発生過程における「動きかたとその動ける感じ」や「動きかたと動きのかたち」の変容を自己観察及び他者観察の側面から記述する。それらを分析・検討し、「運動形態(動きかたと動きのかたち)」の発生・形成・変容の過程、つまり運動技能の習得や上達の過程について明らかにすることを目的とする、と述べる。また、自己観察と他者観察の比較から、「動きかた」の変容についての類似点や相違点を明らかにすることを目的とする、と述べる。)

イ 研究の意義

(運動技能の習得や上達の過程を明らかにするとともに自己観察と他者観察の比較から、「動きかたとその動く感じ」を習得することによる「運動形態(動きかたと動きのかたち)」の発生、形成、変容等についての類似点や相違点を明らかにすることによって、運動観察能力及び運動共感能力を向上させ、体育授業や運動部活動における運動学習や運動指導に役立てる、と述べる。)

2 本論

(1) 研究の方法

ア 研究の対象

(生徒や選手から3名程度を選定する。そして、それぞれが取り組んでいる同様の運動(技)を研究の対象とする。)

イ 研究の期間

(平成00年00月00日～00月00日とする。)

ウ 研究の内容

(研究対象の運動(技)の質の変容について、図形的内容〈局面構造、調和〉、力動的内容〈リズム、伝導、流動、弾性〉、心理的内容〈先取り、正確さ〉の側面から、自己観察及び他者観察を行いその変容を記述する.)

エ 研究の手順

(単元計画や練習計画に基づき、運動(技)の習得過程及び発生過程について自己観察及び他者観察を定期的に10回程度行う.)

オ 研究の分析

(自己観察及び他者観察の観察記録の内容について分析、検討を行う.)

(2) 観察結果(動きかたとその動く感じの観察記録)

ア 自己観察(内観観察分析)

(運動実践者が取り組む学習対象や練習対象の運動(技)について、「動きかたの要点」を3点ほど本人から聞き取り記述する。そして、その要点を踏まえさせながら、運動(技)の習得過程における「動きかたとその動く感じ」の変容について、本人の自己観察を聞き取り記述したものを整理する.)

イ 他者観察(印象観察分析)

(運動実践者が取り組む学習対象や練習対象の運動(技)について、「動きかたの要点」を3点ほど記述する。そして、その要点を踏まえながら、運動(技)の発生過程における「動きかたと動きのかたち」の変容を他者観察により感じ取り記述したものを整理する.)

(3) 考察

ア 視点1

(運動形態発生に係る習得原理を見つけ出すという視点から、3名について、自己観察による「動きかたとその動く感じ」の習得過程における変容などを検討、考察する.)

イ 視点2

(運動形態発生に係る発生原理を見つけ出すという視点から、3名について、他者観察による「動きかたと動きのかたち」の発生過程における変容などを検討、考察する.)

ウ 視点3

(運動形態発生に係る習得・発生原理を見つけ出すという視点から、「動きかた」の変容について検討、考察し、自己観察と他者観察による類似点と相違点を見つけ出す.)

3 結論

(1) まとめ

ア 自己観察の側面から

(運動(技)の習得原理をまとめ、運動の学習指導やコーチにあたっての示唆を得たということ述べる.)

イ 他者観察の側面から

(運動(技)の発生原理をまとめ、運動の学習指導やコーチにあたっての示唆を得たということ述べる.)

ウ 自己観察と他者観察との比較から

(運動(技)の「動きかた」についての相違点や類似点をまとめ、運動の学習指導やコーチにあたっての示唆を得たということ述べる.)

(2) 本研究の限界

(本研究からは限られた者の運動(技)についての運動技能の習得や上達過程について明らかになったものであり、すべての運動(技)について明らかになったわけではない、というように本研究の限界を謙虚に述べる.)

(3) 今後の課題

(この研究成果をより確かなものとするため、本研究を基にして、対象者や対象運動(技)などを変えるなど、新たなテーマを設定し、そのテーマを達成するための課題を把握し、研究を継続する、と述べる.)

〈後文関係〉**1 注**

(注1: 運動技能とは、個人や集団の運動課題を解決し運動を遂行するための総合的な能力と定義することができる。その総合的な能力とは、対象運動についての合理的な「動きかたやその動ける感じ」を習得する能力としての「技術力」や、練習などで覚えた「動きかたやその動ける感じ」を試合などで効果的に使いこなす能力としての「戦術力」、そして、それらを支える身体的な能力としての「専門的体力」や精神的な能力としての「気力」の諸要因で構成されている。

言い換えれば、「動きかた」を発生する能力、その「動きかた」を試合などで適応する能力、それらの「動きかた」を支える身体的な能力や精神的な能力を含めた総合的な能力をいう.)

(注2: 「動きかたとその動ける感じ」の習得過程や「動きかたと動きのかたち」の発生過程における運動質の変容についての自己観察及び他者観察の視点は次の通りである.)

(1) 図形的内容

- ア 動きの局面構造とは、～.
- イ 動きの調和とは、～.

(2) 力動的 content

- ア 動きのリズムとは、～.
- イ 動きの伝導とは、～.
- ウ 動きの流動とは、～.
- エ 動きの弾性とは、～.

(3) 心理的内容

- ア 動きの先取りとは、～.
- イ 動きの正確さとは、～.

2 文献(引用, 参考)

- (1) 伊藤政男ら 中・高等学校体育授業における履修実態に関する研究 体操競技・器械運動研究① pp. 25-36 日本体操競技・器械運動学会 2003
- (2) 浦井孝夫ら 小学校学習指導要領にみる器械運動の特性についての検討 スポーツ教育学研究 pp. 29-38 日本スポーツ教育学会 1994
- (3) 金子明友編訳 マイネル遺稿 動きの感性学 大修館書店 1998
- (4) 金子明友著 わぎの伝承 明和出版 2002
- (5) 金子明友著 身体知の形成(上) 明和出版 2005
- (6) 金子明友著 身体知の形成(下) 明和出版 2005

(平成17年8月27日 受付)
(平成17年11月25日 受理)